連携先世界遺産：　音羽山清水寺
清水寺の△△の〇〇（良い点）を磨け！、もしくは□□（困っている点）を救え！

境内の魅力を再発見しそれを伸ばす、あるいは問題点を発見しその問題解決を図る、いずれにしても独自の視点で新しい課題を見つけ解決する

■受講生

任 弘哲（立命館大学・理工学部・3年生）
川内野 巧実（立命館大学・情報理工学部・4年生）
小井田 一真（立命館大学・スポーツ健康科学部・1年生）
竹田 悠人（立命館大学・理工学部・3年生）
丸谷 紋加（立命館大学・総合心理学部・2年生）
吉田 心（立命館大学・経済学部・3年生）
片山 由樹子（京都女子大学・発達教育学部・3年生）
黒川 実園（立命館大学・法学部・2年生）
酒井 亮介（立命館大学・文学部・2年生）
服部 龍到（立命館大学・理工学部・2年生）
吉田　彩乃（同志社女子大学・表象文化学部・3年生）

■担当教員

宗本 晋作（立命館大学・理工学部・教授）
遠藤 直久（立命館大学・理工学部・講師）
青柳 憲昌（立命館大学・理工学部・准教授）
TA　中川 友風弥（立命館大学・理工学部・4年生）

活動目的・概要

清水寺でもまだ気づいていない、時代を超え後世まで維持していくべき良い点は何か？逆にまだ気づいていない困っている点は何か？フィールドワークを行って、建築学の視点から対象の課題を発見、提案作成、発表、検証を繰り返し、創造性豊かに解決する提案を目指しました。

授業は清水寺にて対面方式で行い、第2回授業では森清顕先生に境内を案内していただき、清水寺に対しての理解を深めました。11人の受講生を大学、専門分野が偏らないよう2つのグループに分け、個人でなくグループでの作業を基本としています。毎回の授業準備では、グループ内で意見交換しながら「他の人に伝える材料」を用意しました。授業では、担当教員、時には森清顕先生を交えて、意見を交換しながら再検討しました。これらの過程を繰り返し、最終的な提案へまとめていきます。

授業の目的は、解のない課題と向き合い解決する能力養うこと、他大学の学生や専門分野が異なる学生同士が積極的な交流を図ることです。結果、グループでの活動や活発な議論を経験した歴代の受講生が清水寺のファンとして定着しています。

◆主な活動

2024.5.26（日）ガイダンス
2024.6.4（日）概要説明、清水寺境内見学
2024.6.4（日）自己PR、グループ分け
2024.6.16（日）（講義）清水寺の建築的視点と歴史
2024.7.7（日）現地調査計画の発表、フィールドワーク
2024.8.18（日）草案批評1
2024.9.14（土）草案批評2
2024.9.15（日）草案批評3
2024.9.29（日）草案批評4
2024.10.20（日）中間発表、講評
2024.11.10（日）草案批評5
2024.11.24（日）成果発表会準備　発表練習
2024.12.8（日）成果発表会

活動の成果

観音様から感じる自身の内面への旅

現在、情報化社会の中で、インターネットやAIを活用することで多くの欲求を容易に満たせる時代に生きています。このような時代だからこそ、清水寺のような特別な場所を訪れ、そこでしか得られない体験の価値を見つめ直す必要があると考えます。清水寺を訪れることで得られる独自の体験として、「ふれ愛観音」と「濡れて観音」という観音像に注目しました。 これらの観音像との向き合い方として、いくつかの方法を提案します。

まず、目を閉じて観音様に触れることで、視覚に頼らない純粋な感覚で観音様を感じる体験が得られます。また、鏡に映る自分と観音様の姿を重ねて見つめることで、観音様と自分自身のつながりを感じる時間を作り出すことができます。このような体験は、観音様の慈悲心を感じるだけでなく、自身の内面を見つめ直し、観察力や他者と向き合う心を育む機会となるでしょう。

さらに、清水寺の喧騒の中でも、観音様とのこのような静かな対話の時間を通して、内面の安らぎや自己認識を深めるきっかけを得ることができます。これにより、清水寺を訪れる人々が観音様の存在をより深く理解し、敬意をもって向き合うきっかけとなります。このような特別な体験が、現代の情報化社会において清水寺の価値を再発見させるものとなるでしょう。

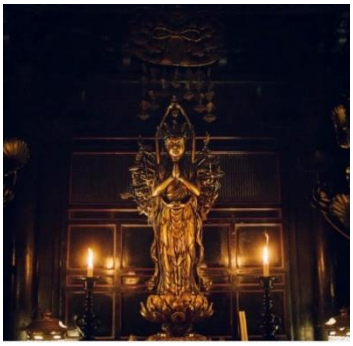
清少納言と歩く清水寺

私たちは清水寺の歴史を意識しないまま観光している人が多いと感じました。そのため、私たちは清水寺にどのような歴史があるのか知ってもらいたいと考えました。そこで、清水寺の過去と現在の相違点や共通点を知り、過去にタイムリープしながら清水寺に参詣してもらえば、興味を持って貰えるのではないかと思いました。

そのために文学を使った見方を考えました。私たちは文学ならではのタイムスリップを提案します。文学は、行間を読み取ることで空間体験を豊かにできると考えます。例えば、解釈の多様性、心情など事実以外のことも想像して楽しめることがあげられます。

私たちは「枕草子」を取り上げました。『枕草子』は多くの人が小学生から習う馴染み深い作品で、老若男女問わず誰でも知っている古典作品です。多くの人が親しみを思って楽しんでもらえます。枕草子で描かれた場所に行き、音声ガイドを聞いて清少納言が感じた清水寺を現代の人たちに感じてもらえたらいいと考えます。

この手法は、清水寺に限らず、市内の寺社仏閣にも応用可能な、文学との組み合わせにより、観光体験を豊かにするなど、今後の幅広い展開が考えられる有効な手立てだと考えています。



活動を振り返って

・お寺を文学という視点を通して考えてお寺の魅力を再発見することができた。

・大学や学部の異なる人たちとグループワークを通して活動できて楽しかった。

・このPBLを通して清水寺の歴史の奥深さや信仰のあり方について知ることができてとても有意義だと感じました。

・普段、観光するだけでは気づけなかった清水寺の魅力をたくさん知ることができました。班のみんなで協力してひとつの成果物を作るのは大変でしたが、良い学びとなりました。

・有名な観光名所で何度か訪れたことのある清水寺でしたが、まだまだ気づいていない魅力が沢山あるのだと思いました。住職さんや他大学の方とも交流することができ、普段の大学生活とは違う、良い経験になりました。

・授業として寺で勉強することなんて無かったのでとても新鮮な感じでした。タメになる話を聴けてとても良い経験になりました。

・試行錯誤の過程で清水寺を様々な角度から考える事ができ、単なる興味の観光とは異なる文化的な奥深さを感じました

・世界遺産である清水寺で班員と清水寺の良いところを磨くための議論ができ、良い糧になりました。

・清水寺のことを私たちからの視点とお寺からの視点の両方を含めて課題や良いところを検討できて貴重な経験になりました。

・日本の代表的な文化遺産の一つである清水寺の今まで考えることの無かった部分に触れる貴重な機会となりました。

担当教員からのコメント

宗本晋作

課題の解決法と問題設定の組合せを学生自身で発見しなければならないため、最初の部分で手こずる学生は多い。しかしながら、苦戦しながらも見出した活路は、魅力ある新しい構想、それを人に伝えようとする高い創作意欲に繋がり、何より長い目で見たときに必ず有用となる学生自身の表現や纏める能力になると信じ、毎回、徹底した姿勢で指導している。今回も苦労していたように思うが、その分、学びは大きいはずである。授業時間後や時間外の長時間にわたる積極的な実地調査や議論により、期待以上の成果品ができた粘り強さ、高い向上心に賞賛とエールを送りたい。学生たちの新鮮なアイデアを共にブラッシュアップしていく過程で、私自身も考えさせられ、共に学んだと痛感している。この背景には、森清顕先生をはじめとする清水寺の大きなサポートがあったことを特筆させて頂いた上で、今一度、同寺関係者の皆様には深く感謝を申し上げたい。

青柳憲昌

この課題は、清水寺について学生たちが感じた良さや現代的課題を発見し、それをもとに他の社寺などにも適用できるモデルを提案してもらうというものです。テーマが広く、難しい課題に対して学生は意欲的に取り組み、当初の期待以上の成果が生まれたと思います。学生たちは、伽藍に込められた仏教思想や清水寺について記された古典文学について学び、現代社会に繋げるという若々しいアイデアを提案してくれました。各グループの最終成果物はとても刺激的な提案になったと思います。

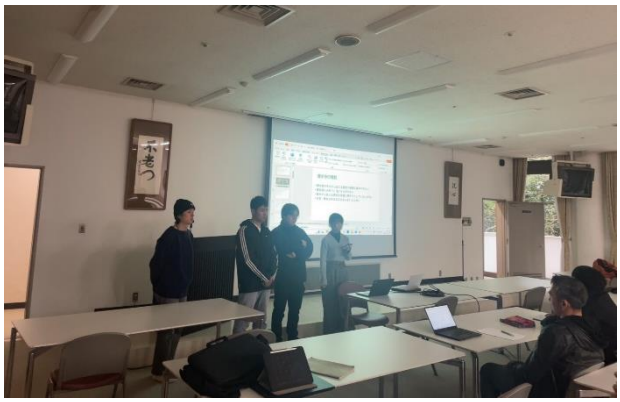
遠藤直久

本年の受講生たちはコロナ感染症の脅威から復活を遂げ、参拝するとてもたくさんの人々が集まる清水寺での活動に邁進してくれました。皆さんは意欲的に活動できており有意義な経験となったと思います。課題に対し学生たちは素直でユニークな視点と考える努力の結果、素晴らしいアイデアを展開させ素晴らしい提案を見せてくれました。ただ受け容れるだけの学びではなく、自ら手応えを感じながら掴んでゆく学びに価値のあった時間となったと思います。この課題を通して得た経験を、これからの社会活動や人生において必ずや役に立ててくれると信じています。我々にこのような機会を与えてくださった森清顕氏をはじめ関係者の方々に心より深謝いたします。

活動資料

（左）森清顕先生の講話を聞いている様子。初めて知る清水寺の興味深い歴史がたくさんありました。
（右）森清顕先生に清水寺境内を案内してもらった時の様子。森先生のお話を聞きながら、時には質問をしながら清水寺の歴史と現存する建物を対応させながら散策し理解を深めました。

授業は主に、先生方と対話し案を練る（建築の言葉でエスキス）形式で行いました。
先生から厳しい意見が出ることもありましたが、自身の案を飛躍させ、独創的な提案をするために議論を重ねました。



グループで決めたテーマからそれぞれ調査を行いました。（左）多くの人で賑わう中、観音様と向き合うにはどうすればよいか実際に様々な方法を試しながら散策。（右）文学という広いテーマから、様々な要素を考慮し、使用する文学の条件を決定する様子。